薩摩スチューデント

JR 鹿児島中央駅の前に,「薩摩の若き群像」の銅像が堂々とそびえる。この像の若者たちは「薩摩スチューデント」と呼ばれ,鎖国の時代に西洋の国で学問を修めた薩摩の若者たちである。

薩摩藩の第 11 代藩主の島津斉彬は，日本国が西欧列強の植民地とならないよう，西洋の知識と技術を習得し，日本を強くする必要があると考えていた。斉彬は 1858 年に亡くなったが，彼の思いは 1865 年に薩摩スチューデントの英国への派遣により実現された。渡欧した薩摩の若者たちは（一人を除き，全員日本に帰国し）国の近代化に大いに貢献した。

生麦事件と薩英戦争

1862 年，生麦村（現・神奈川県横浜市）において，薩摩藩主の島津茂久（忠義）の父・島津久光の行列を乱した４人のイギリス人たちが,供回りの薩摩藩士たちに殺傷された(1 名死亡，2 名重傷)。文化的な誤解により生じた不運な出来事であるが，結果として英国は幕府と薩摩藩に高額の賠償金の支払いを要求する事となる。

生麦事件の賠償問題がおさまらず，英国艦隊が翌年鹿児島湾に現れ，直接薩摩藩と交渉しようとした。薩摩藩側は時間稼ぎの為回答を出さず，これにしびれを切らしたイギリス側は薩摩藩の汽船３隻を拿捕するという強硬手段にでる。これを開戦の意思と受け止まった薩摩藩は英国艦隊に対して砲撃を開始し，これにより薩英戦争が勃発した。英国側は多数の死傷者を出し，薩摩藩側は鹿児島城下北部を焼き，諸砲台は壊滅的損害を受けた。

薩英戦争の勝敗については議論の余地があるが,薩摩藩は西洋の軍事力の強さを目の当たりにし,斉彬が主張していた西洋の知識と技術を習得することの重要さを再認識するきっかけとなった。薩摩藩は迅速に働きかけをし，のちに「薩摩スチューデント」と呼ばれる 19 人の若者を英国に留学するに至った。

世界へ旅立つ

世界から学ぼうと決意した薩摩スチューデントたちは，1865 年 4 月に，現在のいちき串木野市の羽島から出港した。鎖国中のため海外渡航は禁止されており,藩からの表向きの辞令は「甑島・大島周辺の調査」であったが，スコットランド出身の商人トーマス・ブレーク・グラバーの手配で，留学生一行は香港行きの商船に乗船し，世界へ旅立った。

最初の目的地の香港ではガス燈で彩る香港の夜景に見惚れ,シンガポールでは人生初のパインアップルを試食した。また，あるオランダ人の家族が公の場でお互いにキスをし，別れる場面を見て衝撃を受けた。その後，マレーシアのペナン，インドのゴアとムンバイ，イエメンのアデン，エジプトのスエズとアレクサンドリア，マルタ，ジブラルタルを経由し，終点のイギリスの

サウスハンプトンにたどり着いた。

彼らは（長沢氏を除く）ロンドン大学に入学し，ヨーロッパ人との交易関係を築き，1867年のパリ万博に薩摩藩が単独で出展できるように手配し，琉球織物，砂糖，漆器，陶器などを展示し，世界への情報発信のきっかけを作った。留学を終え日本に帰国した後，日本の近代化に大いに貢献した。そして留学生の中の多くが様々な分野における指導者として重役を果たした。その一部を下記に紹介する。

- 町田 久成：博物館建設のために尽力し，帝国博物館（東京国立博物館の前身）の初代館長となった。
- 寺島 宗則：外交官として条約改正に取り組み，外務卿・文部卿・元老院議長などを歴任。
- 五代 友厚：大阪の経済の近代化に貢献；大阪商工会議所初代会頭。
- 吉田 清成：大蔵省に出仕し，岩倉使節団に随行し外債募集にあたり，日本の金融政策の近代化に貢献。
- 畠山 義成：文部省に出仕し，東京開成学校（東京大学の前身）校長，東京書籍館・博物館館長などを勤め，日本の教育制度の充実に力を注いだ。
- 森 有礼：明治政府に出仕し，後には初代文部大臣を勤め，日本の教育制度の充実に力を注いだ。
- 鮫島 尚信：明治政府に出仕し，外交官としてイギリス，フランス，プロシャとの外交を掌握し，明治11年（1878）には駐仏特命全権公使として渡仏し，その2年後にはポルトガル・スペインの公使も兼ねるといった多忙きわまる生活を送っていた。
- 朝倉 盛明：明治政府に出仕し，兵庫県の生野鉱山の開発に取り組み，生野鉱山と姫路市飾磨港を結ぶ鉱山関連物資輸送用の馬車道の整備など，生野鉱山の近代化に力を尽くした。
- 中村 博愛：薩摩藩開成所のフランス語教授となり，また政府に出仕し，後に外交官として各国（イタリア・オランダ・デンマーク）を回ることとなり，晩年は貴族院議員となった。

<u>若きの勇者 – 長沢 鼎</u>

留学生の中では最年少の長沢鼎は，渡英当時13歳であった。大学の入学年齢に達していなかった為，仲間と別れ，一人でスコットランドのアバディーン・グラマー・スクールに通った。スコットランドで約2年間を過ごし，1867年7月に渡米し，カリフォルニアのサンタローザで永住した。長沢はカリフォルニアでのワイン醸造を成功させ，今でも人々に「ブドウ王」や「バロン・ナガサワ」と称されている。

Image Use　画像使用

1. 薩摩若きの群像：筆者が撮影した写真。
2. Namamugi incident.jpg – Hayakawa Shozan; [Public Domain] via Wikimedia Commons
3. Anglo-Satsuma War – Negociations on the Semiramis.jpg; July 1863. Source: "Le Monde

Illustre", 26 Septembre 1863 - [Public Domain] via Wikimedia Commons.
4. Satsuma Students in Keio era.jpg - Sappan Kaigun Shi (History of Satsuma Domain Navy). Volume 2, Sappan Kaigun Shi Kankōkai, 1928. 公爵島津家編輯所編纂 『薩藩海軍史 中巻』 薩藩海軍史刊行会、1928 年 - [Public Domain] via Wikimedia Commons.
5. Satsuma Students to western countries in Keio era.jpg - Sappan Kaigun Shi (History of Satsuma Domain Navy). Volume 2, Sappan Kaigun Shi Kankōkai, 1928. 公爵島津家編輯所編纂 『薩藩海軍史 中巻』 薩藩海軍史刊行会、1928 年 - [Public Domain] via Wikimedia Commons.
6. Japanese Satsuma pavillion at the French expo 1867.jpg - 1867 French photograph, anonymous - [Public Domain] via Wikimedia Commons.